

川西市立桜が丘小学校 桜っ子だより



始業式でお話したこと

みなさん、おはようございます。

みなさんは、どんな夏休みを過ごしましたか。夏休みにあった出来事や思い出に残ったことをお友だちや先生に話してみましょう。楽しかったことや驚いたこと、不思議に思ったことや感動したことなど、お互いに体験したことやその時の気持ちを分け合うことができると思いますよ。

さて、今日から2学期が始まりました。この2学期、みなさんは、どんな自分になりたいと思っていますか。そのためには、どんなことをしなくちゃならないか、考えていますか。国語や算数など教科の勉強がどんどんできる人になりたいと思っている人もいるでしょうし、自分の考えをみんなの前で堂々と言える人になりたいと思っている人もいるでしょう。1日も休まずに学校に来たいと思っている人もいるでしょうし、好き嫌いせずに給食を食べられる人になりたいと思っている人もいるでしょう。みんなに優しくできる人になりたいと思っている人もいるでしょうし、みんなから信頼される人になりたいと思っている人もいるでしょう。2学期の目標がもう決まっている人もいるでしょうし、これから考えようと思っている人もいるでしょう。いろいろなことを考えながら、みなさんは今、そこに座っていると思います。

では、なりたい自分になるには、どうすればいいでしょう。校長先生は、今日もこの話をします。

これは、校長先生がいつもお話をする、今から150年ほど前に生まれた芦田恵之助先生の「バラ 二本」の詩です。恵之助先生は国語の先生で、特に作文指導

に力を入れておられた先生です。黒板に貼ってあるのは、恵之助先生ご本人がお書きになった直筆の書です。今は丹波市立竹田小学校という学校に大切に保管されています。この夏休みの間に、竹田小学校の校長先生にお願いをして写真を送っていただきました。

「バラ 二本 一本は花大にして 一本は小 大大を誇らず 小小なるを恥じず 力の限り 咲けるが美わし」

バラの花が二本咲いています。大きい花は大きいことを決して威張らず、小さい花は小さいことを恥ずかしがることもなく、精一杯咲いている。そのことが美しいのですと、恵之助先生は、おっしゃっています。人には得意なことあれば、苦手なこともあります。でも、得意なことであれ、苦手なことであれ、一生懸命にやること、それが何よりも大切です。

校長先生は、小学校の先生になったときに、この詩に出会いました。それ以来、恵之助先生のような心を持った先生になりたい、こんな気持ちを持った子どもたちを育てたいと思ってこれまでを過ごしてきました。

恵之助先生は、またこんなこともおっしゃっています。「十の天分を持つ子が十の作文を書き、六の天分の子が六の作文を書く。それぞれに天分のすべてを尽くしたのだから、それ以上、何を要求するか。」

「天分」とは、その人が持っている「力」のことです。10の力を持っている子が10の作文を書き、6の力を持った子が6の作文を書く。それぞれ自分の力を出し切って書いたのだから、それ以上何を求めることがあるのですか。出来栄えがいいか悪いかではないのです。今、自分の持っている力を出し切ったかどうかが大切なのです。1学期の終業式の日「働かない働きアリ」の話をしました。覚えていますか？ 私たち人間の中には、もともといろいろな力が備わっていて、その力は、本当は誰でも出すことができるようになっていたのだという話をしました。どんな力がいつどんなところで発揮されるかなんて誰にもわかりません。本人も気がついていない力が突然現れてぐんぐん伸びていくかもしれません。そのためにも、まず、なりたい自分の姿を描きましょう。そして、なりたい自分に向かって、毎日を一生懸命に過ごすのです。みんなの一生懸命を先生たちも一生懸命応援します。2学期も、みんなで力を合わせて頑張ろうね。

